



# はつらつフレッシュマン



## きらきら輝く笑顔がみたい

西区 養護学校 養護教諭 田村 彰子

養護学校？一体どんな子どもたちが通っているのだろう？障害のある子どもたちを素直にかわいいと思えるのだろうか。果たして、私に勤まるのだろうか。そんな不安と緊張の中で4月を迎え、一日一日を振り返る間もなく、1学期が終わろうとしている。

本校は心身障害総合センターひまわり学園に併設されており、医師が常駐している。在籍している子どもたちは、知的にも身体的にも大変重い障害がある。ほとんどの子どもたちが言葉によるコミュニケーションは難しい。「ア～」とか「ウィ～」というような発声や笑顔などの表情、あるいは手を振ったり、手足を突っ張ったりすることによって、自分の気持ちを表現している。また、呼吸がうまくできないため、気管切開をして呼吸をしている子どもや、口からの摂食が困難なため、鼻や腸からチューブを通して栄養を摂る子どもなど、いわゆる「医療的なケア」を必要とする子どもたちがたくさんいる。そのため保健室には看護師が3名、養護教諭が2名という特別な体制をとっている。

養護教諭のうち1名は、子どもたちの健康状態を把握するため、できるだけ教室を巡回している。看護師を含め巡回中は、緊急時対応のために携帯電話を所持している。ある日、いつものように巡回していると、携帯電話に連絡があった。看護師とともに駆けつけると、子どもの顔色は悪く、口唇も白く、呼吸が浅かった。直ぐに医師に連絡を取り、気道を確保しながらセンターへ急いだ。その間5分は

どであったが、みるみるうちに様態が変化し、手足の先がチアノーゼを起こし、顔色も青白くなった。初めての経験で、私は恐くなり震えがきたが幸いにもすぐに医師に診て頂くことができた。吸引と吸入をしてもらい一命を取り留めた。しばらくしていつものように髪の毛をいじったり、「ア～ア～」と声を出し始めたりした時はほっとして涙が出た。この仕事の重大さを改めて認識した。

本校の子どもたちは重い障害のため、命がけで登校してくる。そんな中で私には何ができるのだろうと、悩む日も少なくない。言葉で痛みや不快感を表現できない分、ちょっとした表情や顔色、しぐさ、バイタルサインで体調の変化を訴えてくる。4ヶ月経ち、分かったことは、子どもたちに触れ合えば触れ合うほど子どもたちの実態やさまざまな体調の変化が見えてきたということだ。精一杯、身体を使って表現してくる子どもたち、私はこれらの極々小さなサインを見逃さないよう、日々、一人ひとりに目を掛け、手を掛け、声を掛けることに心掛けていきたい。

今は、毎日子どもたちに会うのが楽しみで仕方ない。私は子どもたち一人ひとりがきらきら輝く笑顔で元気に楽しく過ごすことが、理想であり、目標である。子どもたちと過ごす幸せをかみ締めながら、これからも諸先輩方の指導を仰ぎ、努力を惜しまず自己研鑽に励みたいと思う。

(たむら あきこ)